

勝林寺寺報

広由本願力運向

無度群生彰一心

帰入功德大宝海

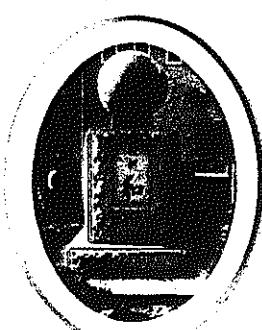
必彌入大会衆教

今月から「平成」が「令和」に変わりました。平成の時代では「誰かに何かをいいつけられる」「いいつけを守る」気持ちが希薄になつたことへの反省なのでしょう。「和」する」とを「令(い)つける」時代となることが願われていると感じます。

そして今年は私の卒業した出石中学校の同窓会が還暦を記念して企画されています。この出石中学校の校訓が「和」でした。もちろんこの「和」とは、親鸞聖人が倭国の教主としてあがめられた聖徳太子が、日本の国創りの最初に制定された十七条憲法の第一条に出でてくる「和を以て貴しと為す」の「和」なのでしょう。この「和」の文字が新しい元号に使われたこともうれしく思います。校訓というものがどの学校にあるのかどうか知りませんが、私の卒業した弘道小学校は「清く 明るく 美しく」、出石高校は「至誠・剛健・敬愛」が校訓でした。自分

の過ごした学校の校訓が今でも懐かしく、それなりに自分も影響を受けて育ってきたようを感じます。

校訓とは違いますが、浄土真宗では大切な三つの心を大無量寿經の「至心 信樂 欲生我國」とします。この信心の解釈をめぐっては、いろいろな角度から、それはそれは膨大な議論がなされているのですが、念佛者としての共通の性格を決めるガイドラインとなつているのではないか



(文責 住職)

葬儀
四月五日
但東町中藤 清水あい子様 九十五歳
(坊守の母)

でしようか。また、親鸞聖人は三心を大切にされると同時に、天親菩薩様が私たちをお淨土に渡るために彰かにしていただき、「一心」を真宗のかなめであると示されました。それは阿弥陀經を読んでいると出てくる、ついつい調子に乗りすぎて読むスピードが上がりすぎてしまう「聞説阿弥陀仏、執持名号、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不乱」の「一心」でした。「一つ」なのか「三つ」なのか。また議論の伯仲するところですが、親鸞聖人はお正信偈の冒頭にあげた一節で、「一心」は本願力により廻向された他力の信心であることを示され、その一心をわが心として受け取ることで、功德の宝の海に入ることがで

き、必ず同じ境地を獲得できると示されているのです。

出石中学校の同級生は二百人ほどいます。それぞれ別々の人生を歩み、あまり似たところもない人格として六十年を歩んでいますが、同窓生として「和」の心を共有しています。同じように、念佛を称えて生きる私たちも、それぞれ別々の、あまり似たところを感じられない人格として生きていますが、その底の底には阿弥陀

きみ子、ルードヴィッヒ・ミコラー、マイケル・ウイリアムズ、坂口昂平)が、勝林寺本堂で本格的なクラシックを聞かせてくださいます。音楽好きな方はもちろん、初めての方もどうぞ気軽にお越しください。

「着物でご縁の会」在勝林寺

五月二十六日(日) 出石観光協会主催の「婚活イベント」が勝林寺と城山ガーデンを会場に行われます。「幸せの出会い」のお役に立てるならと協力を引き受けました。気持ちよい時間をお過ごしていただけるように準備を整えます。」理解、「協力をお願ひいたします。

五月十八日(土) 午後二時より
宗祖親鸞聖人の誕生をお祝いする会を催します。勝林寺役員さまには、法輪会(連続研修会修了者の会)会員さまには、ご案内をお届けいたします。ぜひ、お参りください。

乙案内

五月十八日(土) 午後二時より

五一月 勝林寺 予定

親鸞聖人降誕会

一日(水) 出石但東仏教会 役員会

四日(土) 田中幸男宅 一周忌

花まつり 準備会
出石但東仏教会

花まつり

六日(月) 清水あい子 忽明法要
七日(火) 第二〇期連研 委員会
一日(土) 専福寺 永代経
二日(日) 龜井祐子宅 一周忌
八日(土) 湯口年枝宅 一三回忌
勝林寺 降誕会

街角コンサート開催

六月六日(木) 午後四時から四時半まで

アンサンブル・ウイーン東京の皆さん(中澤きみ子、ルードヴィッヒ・ミコラー、マイケル・ウイリアムズ、坂口昂平)が、勝林寺本堂で本

二五日(土) 第二期連研(真覚寺)
二六日(日) 着物でご縁会
二七日(月) 念仏奉仕団

※ 今月のみのりを聞く会 お休みします
二八日(火) 念佛奉仕団
三〇日(木) 龍谷大学真宗学 住職同窓会
(敬称略)

六月十六日(日)~十七日(月)納骨研修旅行

バス代等の値上げにより、例年通りの土日開催では、参加費を値上げせざるを得ない状況で、役員の皆様と検討を重ねた結果、従来通りの参加費で、日曜日から月曜日の開催とさせていただきました。ご理解の上、ぜひご参加くださいますようお願いいたします。詳しくは、寺報に合わせて配布いたしましたチラシをご覧ください。



相手と同じ立場に立つ

最近のテレビを見ていて、感じるのは、何とあります。火事の報道において、死体を運び出す状況まで、なぜそれを伝えなければならないのか。

先般の島根の女子大学生事件の報道でもそうです。バラバラにされたその遺体のゆくえを尋ねて、「片腕がありましたなどと山の中の風景まで映し出していましたが、そこまで報道して何の意味があるのか。そのニュース・カメラマンは、亡くなった娘さんの両親の胸中を、少しでも想像したことのあるのでしょうか。こんな画像が、その身内の人々の心を、どれほど傷つけることでしょうか。思ひあまることです。心ない仕打ちとは、こういうことをいうではありませんか。テレビの報道の傍若無人ぶりに、いささか眉をひそめざるをえない昨今ですが、これは私一人だけの感想でしようか。

新聞も似たようなものです。先日の新聞（中国新聞）に、国会のヤジについて、自民党の議員が、鳩山首相に向かって、「このドラ息子」と叫んだことについて、「皮肉のきいた言葉」だとほめていましたが、記者はこの「ドラ息子」の意味が分かつて、そういったのか。ドラ息子、ドラ娘とは、『日本国語大辞典』によれば、品行の悪い放蕩息子、どちらうの仲間にに入った娘のことだといいます。一国の首相をここまで非人格的にヤジすることが、皮肉のきいた言葉だと考えるのでしようか。このことは、こんなヤジを飛ばした国会議員の品位の問題ですが、またそれを高く評価する記者、新聞社の品位の問題ではありませんか。新聞は天下の公器であるから、政治家を批判することは大いに結構でしよう。だがこんな次元の低い批判は新聞の品位の問題です。テレビも新聞も、もっと自分自身の

社会的な存在意識を自覚して、興味本位のレベルでなく、まつとうな報道や論説を伝えてほしいものです。

仏教の教えに「同事」ということがあります。

他人とのかかわりをもつときの心のありようを教えてのです。その同事とは、たとえば母親が、赤ん坊にスプーンで何かを食べさせようとすると、アーンしなさい」といながら、自分もまた一緒に口を開けるようなもので、相手と同じ立場に立ち、同じ動作を取ることをいいます。こういう人間関係、同事の心をもち、そういう同事の行動をとつてこそ、人間と人間の関係がうまく成り立ち、世の中もスムーズに動いていくわけでしょう。



(信濃峻磨遺稿法語集より引用)

法語カレンダー五月

ナガの如来は

衆生を一子のごとく

どすん

先日、久しぶりにやつてしましました。足の小指を筆筒の角にガツンと打ち付けたんです。経験のある方はご存知でしょう。痛いですよ。娘は私と似ているのか、同じようなことがありました。娘は肘をドアのノブでガツンと打ったのです。「痛い！」私は愛ある父親ですから、「大丈夫か、ケガしていないか、かわいそうに」と心配しました。自分も同じ経験をしたことがあります。痛いことは知っています。でも、私の時は少しもいたくないです。私たちはたとえ親子としても自分と他者です。気持ちや心は通っていたとしても、娘の痛みを完全に自分の痛みとするとはできないのです。

阿弥陀さまはちがいます。私の痛みを自分の痛みとしてくださる、それがさとりを開いた仏さまです。阿弥陀さまは私が傷つき痛みを覚えたなら、「大丈夫か？かわいそう」と言うだけのお方ではありません。遠くから眺めているだけで、「だいたい、あなたはそそがしいから…」などと理由を告げて、「これから気をつけなさいよ」と注意をし、課題を与えるお方ではありません。自分が痛みを覚えたら、その痛みを放つておくことはできません。すぐに痛いところに手を当てて、その痛みを取り除こうとします。今ここで、誰にもわかつてもられない痛みを覚え、苦しみに苛まれ、孤独を感じるほかない私に「その痛み、苦しみ、孤独、全部この阿弥陀如来が引き受けた。必ず救う」と届いてください。これが淨土真宗・阿弥陀さまのお救いです。（「心に響く」とばより抜粋）

四月五日、母が亡くなりました。多くの方に、通夜、葬儀に参列いたしました。また、門徒の皆様からは、母の好きだったきれいなお花をたくさんお供えしていただき、ありがとうございました。亡くなる前日まで、いつも変わらない日々を送っていました。「暖かくなつたので、そろそろ外に出てみようと思う」と樂しみにもしていました。亡くなる日、朝から頭痛を訴えたので、通院しましたが、異常は見つからず、それでも気分がよくないからと横になりました。そして、何度も会話を交わし、少し離れているとき、そのまま寝ついてるかのように穏やかに逝ってしまいました。最後に聞いた母の言葉は、大好きなお茶を口に運んだ時の「もう一口頂戴」でした。

急な事でしたが、母は折々に自分の葬儀の事、自分が亡くなつた後のことなど伝えておりましたので、残された私たちに迷いはありませんでした。通夜は、慣れ親しんだ中藤の実家で営み、葬儀はホールをお借りして営みました。通夜と言つても、もともとその慣例のない地域ですで、花と棺とお仏壇だけの前で、若院がお勧めをする簡素なもので、家族だけでお参りの方をお迎えしました。しかし、多くの地域の方や勝林寺のご門徒の方がお参りくださり、もともと小さな家はいっぱいになり、入れない方々にはお外でお参りしていただくようでした。

すべてを無事に終えてホールを出る時、住職と私、若院と長女と次男そして私の姉、家族全員がそろつたので、母の遺影と共に記念撮影をしました。母が亡くなつてから三日間、ずっと私たちに寄り添い担当してくださった係の方がシャッターを押して「皆さん本当にフットワークが軽いですね」と子どもたちの動きを褒めてくださいました。自慢の孫を褒めてもらい、母が一番喜んでいました。（文責 坊守）